

# 絵本の読み聞かせ評価システムの開発と実践結果

## — 提出された学生レポートの考察から得られた絵本の読み聞かせの学習効果 —

藤井 康寿\*

Email: fujii@tokaigakuin-u.ac.jp

\*: 東海学院大学人間関係学部子ども発達学科

◎Key Words 絵本の読み聞かせ, 学習効果, 学生レポート, 保育者を目指す学生像

### 1. はじめに

2009年, 一つの絵本作品が子どもから大人までの世代に亘ってブレイクした。その発端は, 米アカデミー賞短編アニメーション賞を受賞した「つみきのいえ」が絵本化されて一大ムーブメントを引き起こしたことに起因する。

このムーブメントが沸き起こった絵本の魅力に関して翻ってみると, 子どもと大人では捉え方が異なっているとの報告があった。すなわち, 子どもたちにとって絵本の魅力は, 耳で聞き, イメージすることで想像力を豊かにすることである。一方, 大人にとっては「子どもと共有する楽しさに加え, 内容や絵を分析したり, 作者の意図を読み取ったり, 子どものころには気付かなかったことを発見して, 大人になってこそ新鮮な気持ちで楽しめる。」との分析結果が報告されている[1]。

絵本は大人から子どもに対して読み聞かせることで, 次の効果が期待できる。一つは, 両親の「生の声」を聞かせることで, 子どもの発育に大きな役割を果たすことであり, もう一つは, 絵本の読み聞かせを繰り返し行うことで, 子どもの感性が育ち, 的確に言葉の意味を把握し, 理解する能力(いわゆるコミュニケーション力)が培われる。ここで言うコミュニケーション力は, 自分の気持ちを伝えたり, 相手の気持ちを理解することを言い, 本を読む, 人と話すという経験によって養われるものであるが, 絵本の読み聞かせによっても獲得することができる[2]。

本研究では, 絵本の読み聞かせの実践演習後に提出された学生のレポートから, 保育者を目指す学生が心掛けるべき姿勢として, 保育のあり方の基本を再確認する結論が得られたので報告したい。

### 2. 先行研究と問題点

保育者による絵本の読み聞かせは, 子どもを本好きにする有効な手段として報告がされている[3]。

南[4]は読み聞かせにおける「声」の重要性を取り上げて, 「声の力, 声のもつ身体性, そして聞くものに対する声の働きかけ」が絵本の読む行為で最も大切であると述べている。その上で, 保育者となる学生には, 大人と子どもの共通体験の空間の中で, 絵本のもつ創造的表現活動の基盤を形成することが重要であると述べている。

西川[5]は朗読ボランティアの講習会を受講した経験から, 授業で聞く側の立場を取り入れた絵本の読み聞かせの修得方法を実践した。特徴として, 学生は読み

聞かせ役と聞く側の幼児役, および評価役(保育実習などで学生を指導する保育者)の三役を演じることである。幼児役のとき, 他の学生が行う絵本の読み聞かせを子どもの観点で楽しむことで, 立場が逆転して読み聞かせ役となるときには, 子どもたちへの配慮や読み聞かせ方法などフィードバック効果が得られたと報告している。また, 評価役は, 後述する評価項目を疑似体験することで, 読み聞かせの評価となるポイントを再認識し, 知識として定着が計られると考察している(第3章参照)。

西川の試みは評価役の評価項目が点数化されるので, 教授する側においては全体的な傾向を考察するには好例である。また, 授業のポイントが整理されて今後の指導方法に生かす有効な資料となり得る。しかし, 読み聞かせを行った学生においては, 評価やコメントを即時的に伝えることができない問題点が挙げられる。また, 評価役のとき, 絵本の読み聞かせを行っている学生に配慮した評価を与える場合があり, 客観的で公平性であると言えない場合もあり得る。

#### 2.1 本研究で改善した方法と研究目的

本研究では南が指摘した声の重要性や, 西川が考案した絵本の読み聞かせの方法や技術の修得について, 問題点を改善する方法を考案したので報告したい。すなわち, 評価やコメントを即時的にフィードバックする事柄に関しては, 第3章で詳述するモバイルウェブサイト構築して, 予め受講者全員のメールアドレスをデータベース化して, 評価役の学生から読み聞かせ役の学生へ得点化された評価やコメントを, ウェブメールで送信される仕組みとした。また, 公平性の評価の確保に関しては, 特定の曜日と時間帯に一般者向けに開放されている学内の付帯施設を利用して, 未就学児童向けの遊びの会を開催した。遊びメニューのイベントの一部として絵本の読み聞かせを実施した(第4章参照)。その折に, 評価役の学生にはモバイルウェブサイトを用いて評価を行ってもらい, 一般の保護者にも評価役の学生と同じ内容の評価項目のアンケート用紙を配布して, 評価してもらうことで客観性が確保される仕組みとした。

絵本の読み聞かせ役の学生は, モバイルウェブサイトによる自己評価の他に, 評価役の評価(点数)とコメントおよび, 参加者(保護者)のアンケート用紙を含めた3種類を受け取った上で, 感想および課題点をレポートとしてまとめて提出させた。提出されたレポ

ートには、自己評価、評価役および保護者の評価を踏まえて、良かった点や課題点が記入してあった。特に、保育実習とは異なり、面識のない子ども達の前で絵本の読み聞かせを行うときの課題点や感想がレポートにまとめられており、新たな知見が得られたので報告したい。

本研究では、Web上に公開した絵本の読み聞かせの評価システムの活用方法を紹介するとともに、絵本の読み聞かせ評価項目に対する3種類（自己評価、評価役および保護者）の評価とコメントから、学生が学んだ事柄について、提出されたレポートを通して紹介することを目的とする。また、自己評価、評価役および保護者の評価得点から学生の絵本の読み聞かせの振り返りの学習効果に関しても考察することを目的とする。

### 3. 絵本の読み聞かせ評価システムの使い方

最初に、本研究で開発して絵本の読み聞かせの評価に活用したモバイルウェブサイトの使い方を説明する。

1) 準備として、絵本の読み聞かせを行う受講者全員の個人データ（学籍番号、氏名、スマートフォンなどのメールアドレス）をテキストとして予めサーバー上に登録しておく。

2) 次に、第4章で詳述するイベントで評価役となった学生は、Webサイトを通して絵本の読み聞かせを実施した学生に対して、以下の手順で評価を行い送信する。

i) 携帯電話やスマートフォンからQRコードの読み込みや、URL(<http://freelabo.hotcom-web.com/study/evaluate/evaluate.html>)を打ち込んで、トップ画面を起動する。なお、トップ画面の掲載は割愛した。

ii) トップ画面内で「A 絵本読み聞かせ」をクリックすると、Fig.2に示す絵本の読み聞かせを評価するためのWeb入力画面が表示される。

図中の①～⑤の手順に従って情報の入力や評価の選択を行う。項目①では評価役の学籍番号と氏名、項目②では絵本の読み聞かせを行った学生の学籍番号、氏名と絵本のタイトルを入力する。項目③では絵本の読み聞かせを行った学生に対して、評価役が以下に示す7つの項目に関して評価結果を選択する。具体的には項目④に示すように、「はじめの話、声の大きさ、読む速さ、表現や表情、絵本の見せ方、終わりの話」の評価項目に対してプルダウンメニューの選択形式で評価して、全ての項目に共通の内容で「大変よくできました(4)、よくできました(3)、ふつう(2)、もう少し頑張れ(1)、いっぱい頑張れ(0)」の中から一つ選ぶ。ここで、カッコ内の数字は、各選択評価内容を得点化するための数値である。項目④の7つ目の「Q7. 今後の課題」は、70文字以上100文字未満のコメントを記入するテキストエリアである。入力文字数を設定した理由は、ごく簡単な感想を記入するだけでなく、次回に繋がる指摘や絵本の読み聞かせ状況を短文としてコメントして欲しいと考えたからである。なお、絵本の読み聞かせのイベントに参加した保護者には、上述の内容を「絵本の読み聞かせに関するアンケート」として紙面で配布し、イベント終了後に回収して絵本の読み聞かせを行った学生に手渡した。これら一連の

操作完了後、送信ボタンを押すと操作は終了する。

以上の操作手順で送信された評価点数やコメントは、Fig.3に示すようにCSV(Comma Separated Values)形式でサーバー上に保存されると同時に、予め登録しておいたメールアドレスの中から絵本の読み聞かせ役のメールアドレスを探索して、ウェブメールとして評価得点やコメントが即時的に送信される。

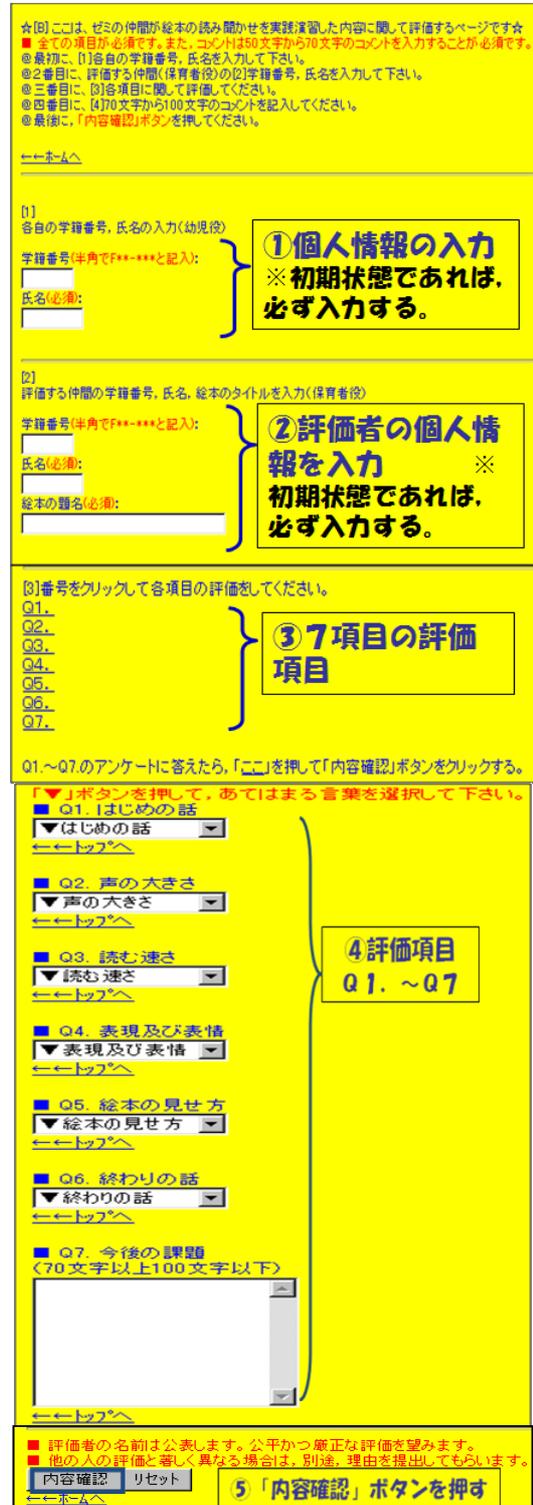


Fig. 2 評価画面

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1	2012年03月12日 (19:21:50)	F24-001	テスト	F24-002	藤井康寿	東海絵本	0	1	2	3	4	0	テスト	05テスト10

Fig. 3 サーバー上に保存されるデータ内容形式

#### 4. T大学附属施設におけるイベントと絵本の読み聞かせの実践

(1) イベント担当者数と協力を得た学生について

開発した絵本の読み聞かせの評価システムを実践するに際して、3年次に開講されている「子ども発達演習」の受講生8名の協力を得て、地域の未就学児童を対象に下記項目(2)の施設においてイベントを開催した。ここで、3年生に協力を得た理由は、保育実習を2年生後期(11月)に体験しており、子どもの接し方にある程度理解していること、3年次の夏休み(9月)に幼稚園実習を控えており、自己の課題を見つけて探求するきっかけとなり得ると期待したからである。

(2) 実践方法

T施設を利用して、イベントを開催するチラシをつくり、大学ホームページに掲載してもらい一般参加者を募集した。

本研究の実践報告は、平成24年6月23日(土)の午後1時から午後4時に行った内容をまとめたものである。イベント内容の詳細をFig.4に示す。なお、当日のイベントは、8名の受講者を2グループ(前半と後半)に分けて、4名(男性2名、女性2名)が担当した。また、T施設利用時間3時間の内、30分程度のイベントを2回開催し、残りの時間は施設内の遊具で来場した子ども達と自由に遊んだ。

各イベントは、Fig.4のペープサート「夏の訪れ」と手遊び歌2曲のうち、1曲を選んで全員で行い、絵本の読み聞かせ4冊は、前半のイベントで2冊を男子学生2名が担当し、残る2冊は後半のイベントで2名の女子学生が担当した。したがって、ペープサートと手遊び歌以外は、参加協力した全員の学生が絵本の読み聞かせを実践した。なお、前半のイベントには8月11日に開催する予定のゼミ受講生の女子学生2名が見学に来たので、絵本の読み聞かせの評価役に加わってもらった(後半のイベントには参加せず)。

(3) イベント参加人数(保育者と子ども)とアンケート用紙回収枚数

前半のイベント参加人数は、大人6名(男性1名、女性5名)、子ども8名(全員未就学児で、男子4名、女子4名)。アンケート用紙は6枚回収した。

後半のイベント参加人数は、大人11名(男性1名、女性10名)、子ども13名(全員未就学児で、男子8名、女子5名)。前半のイベント6名が後半のイベントも引き続いて参加したので、アンケート用紙は新規参加者の5枚分を回収した。

#### 5. 絵本の読み聞かせの評価結果

30分間のイベント内で実践した絵本の読み聞かせ(前半と後半の2回分)の評価結果をTable 1及びTable 2に示す。

各表の設問1~6は、Fig.2に示した評価項目に関して、3者(読み聞かせ役、評価役および保護者(参加者))の評価結果をまとめたものである。表中の結果は、第3章で詳述した携帯サイトからサーバーに送信されたデータ(CSV形式のデータ)に、アンケート用紙で回答してもらった保護者の評価を活用した。



Fig. 4 イベント内容

Table 1 評価結果(前半のイベント)

評価項目	男子学生A	男子学生B
問1 「はじめの話」 絵本を読む前のお話について	1.00 2.80 (0.56,0.75) 2.50 (0.92,0.95)	1.00 2.00 (0.80,0.89) 2.17 (0.47,0.69)
問2 「声の大きさ」 声の大きさや抑揚について	3.00 3.80 (0.16,0.40) 2.67 (1.22,1.11)	2.00 2.20 (0.56,0.75) 2.00 (1.00,1.00)
問3 「読む速さ」 読み聞かせの速さやテンポについて	4.00 3.20 (0.56,0.75) 2.83 (0.47,0.69)	2.00 2.20 (0.16,0.40) 2.83 (0.47,0.69)
問4 「表情」 絵本を読んでいるときの表情について	3.00 2.00 (0.00,0.00) 2.17 (0.81,0.90)	1.00 1.20 (0.16,0.40) 1.67 (0.56,0.75)
問5 「見せ方」 絵本の持ち方や見せ方について	2.00 2.60 (0.24,0.49) 2.67 (1.22,1.11)	2.00 2.60 (0.24,0.49) 2.67 (1.22,1.11)
問6 「終わりの話」 読み聞かせ終了後のお話について	1.00 2.40 (0.24,0.49) 2.40 (0.64,0.80)	0.00 1.40 (1.04,1.02) 1.60 (0.64,0.80)
自己評価の合計	14.00	8.00
評価役の合計	16.80 (1.36,1.17)	11.60 (9.04,3.01)
保護者の合計	14.83 (20.47,4.52)	12.76 (11.89,3.45)

Table2 評価結果 (後半のイベント)

後半のミニイベント・午後2時45分から午後3時20分			
I) 読み聞かせ役 (自己評価) ・学生2名 (女性2名)			
II) 評価役 ・学生3名 (男性2名, 女性1名)			
III) 保護者による評価 ・アンケート用紙5枚回収			
参加者: 大人11名 (男性1名, 女性10名)			
子ども13名 (男子8名, 女子5名)			
※各設問に対する点数化された評価の表示方法			
上段: I (自己評価値), 中段: II (5名の平均値),			
下段: III (6名の平均値), 各段の括弧内: (分散, 標準偏差)			
評価項目	女子学生A	女子学生B	
問1 「はじめの話」	3.00	1.00	
絵本を読む前の話について	3.00 (0.67,0.82)	2.67 (0.22,0.47)	3.20 (0.16,0.40)
問2 「声の大きさ」	2.00	2.00	
声の大きさや抑揚について	3.67 (0.22,0.47)	3.00 (0.67,0.82)	2.60 (0.64,0.80)
問3 「読む速さ」	2.00	2.00	
読み聞かせの速さやテンポについて	2.67 (0.22,0.47)	3.00 (0.00,0.00)	2.80 (0.96,0.98)
問4 「表情」	1.00	1.00	
絵本を読んでいるときの表情について	2.00 (0.67,0.82)	2.67 (0.89,0.94)	2.40 (0.64,0.80)
問5 「見せ方」	2.00	2.00	
絵本の持ち方や見せ方について	2.67 (0.22,0.47)	3.00 (0.67,0.82)	2.60 (1.04,1.02)
問6 「終わりの話」	2.00	1.00	
読み聞かせ終了後のお話しについて	2.33 (0.22,0.47)	2.00 (0.67,0.82)	3.20 (0.16,0.40)
自己評価の合計	12.00	9.00	
評価役の合計	16.33 (0.22,0.47)	16.33 (0.22,0.47)	
保護者の合計	16.80 (15.36,3.92)	17.00 (14.40,3.79)	

## 6. 考察

Table 1 および Table2 より、絵本の読み聞かせにおける6項目の合計(問1～問6の合計)は、前半および後半のイベントどちらの読み聞かせ役も、評価役や保護者と比較して自己採点の結果が最も低い点数であった。特に、4人中3人が「はじめの話」と「おわりの話」を1点以下で自己採点していた。評価サイトに送信されたコメントには、「「はじめの話」では緊張して絵本の読み聞かせへの導入ができず、何の手立てが行えないまま絵本の読み聞かせに入ってしまった。」と記述があった。コメントに書かれていた緊張が絵本の読み聞かせに影響したと窺われる様子を別の項目から探すと、設問4の「表情」の点数が男子学生Aを除いて3名が自己採点で1点を付けていることが判った。

評価点数がウェブメールで送られ、回収した保護者のアンケート用紙を参考にして提出された女子学生Aのレポートに拠れば、次のような課題点が挙げられている。第4章で記述したように、グループで行う手遊び歌やペープサートは他の学生と協力して楽しく行うことができたので、子ども達も楽しんでくれたと記述している。一方、絵本の読み聞かせは学生が一人で行うことから、上手に行いたいとの思いから緊張してしまい、楽しんで出来なかったと次のように感想が記述

してあった。子どもたちに絵本で描かれている内容や主題(テーマ)を伝えたいと考えるあまり、余計な思いが巡ったり、上手に読むこと(スキル)に意識が集中したために、読み手自身が楽しむことを忘れてしまったのである。

ところで、読み聞かせの教育的な効果について、一例として次の論文が挙げられる。千古ほか[6]によれば、保育所・幼稚園での学びの基本は、グラウンドで走り回る、工作をする、絵を描くなど「遊びを中心としたしつけと教育」であり、「絵本の読み聞かせ」は教員の活動を中心とした要素が強く二次的なものとして位置づけられている。このことから、絵本の読み聞かせで中心となる読み手は、家庭での保護者(親)であって「知識獲得」を中心に読み聞かせが行われている。また、家庭で多くの子どもの絵本を一人で読むことが多く、一人で内容の反復と理解を行っている傾向にある。それゆえ、保育者は子どもが自ら絵本を手にとって一人で読むきっかけを与えるよう働き掛けが望まれる。本研究では試みの一つとして、学生たちに読み聞かせ役の他に評価役も担ってもらった。これらの経験を通して、絵本の読み聞かせを行う保育者には、絵本を伝える工夫(読み手の声、表情、リズムや抑揚、速度の変化)以外に、子ども達の心の動きを捉える感受性と感情移入できる素養が求められているのである。

## 7. おわりに

本研究は、絵本の読み聞かせを行った学生に点数化された評価やコメントがウェブメールで即時的に伝えることができるモバイルウェブサイトを開発した。大学附属施設を利用して、絵本の読み聞かせを含めた未就学児童対象のミニイベントを企画し実践した。

学生が提出したレポートの今後の課題点から、保育や教育現場で絵本の読み聞かせを行う場合には、「興味をそそる話し方(興味)」、「次はどうなるのかな」と言った話し方(疑問)、「絵本の途中で問いかけると答えてくれた(問いかけ)」を、子ども達から引き出すための素養を獲得する(身につける)必要があることが判明した。

## 参考文献

- (1) 福井新聞朝刊, 2009年5月2日, pp.32
- (2) 子育て応援ポータルサイト「はぐステ」, 2013, <http://www.kids-station.com/> (参照日 2016.1.28)
- (3) 国際子ども図書館, 「第59回学校読書調査結果」, 2013, <http://www.kodomo.go.jp/info/child/2013/2013-108.html> (参照日 2016.1.28)
- (4) 南元子, 「小学校教員・保育者養成校における絵本の位置」, 愛知教育大学 幼児教育研究, 14, 2009, pp.55-60
- (5) 西川宏子, 「保育学生における絵本の読み聞かせの理論及び方法の修得に関する研究～絵本を詠み聞かせられる立場に立つ経験を取り入れることを通して～」, 中国学園紀要(1), 2002, pp.37-41
- (6) 千古利恵子, 中條敦仁, 「アンケート結果をもとにした」絵本の読み聞かせ」 試論—保育・教育現場における読み聞かせの目的を考える」, 京都文京短期大学研究紀要, 48, 2009, pp.54-64